

『ハラヘ』考

杉 山 晴 康

『ハラヘ』考 目 次

- 一、はしがき
- 二、記紀の物語におけるハラヘ
- 三、二つのハラヘの関係
- 四、ハラヘと財産刑
- 五、ハラヘと損害賠償
- 六、むすび

一

前稿『わが古代における「赦」についての一考察』において、わたくしは刑罰觀念の始源としてのハラヘに言及して、大略、つぎのようにそれを指摘した。すなわち、上代の人々は、いたるところに精靈や神がいたと確信していた

し、また、この精霊や神は、場合によつては恐ろしい禍を人々に及ぼすものと思われていた。そしてかかる禍は、人々が精霊や神の忌み嫌うことを行つたおり崇として、もたらされるものであるが、かかる禍の原因となつた人々の言動のみならず、もたらされた禍をふくめて、上代人はツミと呼んでいたと思われる。人々は精霊や神の怒りと、その表現としての禍が自己をふくめて社會のすべての人々にふりかかるのを怖れていた。このような精霊や神よりの禍に對する恐怖の結果、特定の方式に従つて精霊や神の忌み嫌うと思われるケガレを清除し、また、その怒りをやわらげ、ゆるしを得ることが必要であると上代人の素朴な感情の中で彼らは信じていたようである。ハラヘは、その具現として生れたと思われる（註二）。

本稿は、ハラヘについての、このわたくしの漠然とした指摘をさらに追求することを試みたものである。

ところで、記紀をひもとくと、ハラヘにはミソギハラヘとハラヘツモノを神に供えて行ふハラヘの二方式が見受けられるが、その兩者は、記紀の記述において微妙な交錯と差異があり、その根底は複雑な様相を帯びている。まず、この問題について考えなければならない。また、本來は、神に對してなされた宗教的義務であり、儀式であるハラヘの中に、わたくしは、わが古代における公刑罰の始源を見出すのであるが、かかる始源的なものがさらに、宗教的なものから公刑罰——特に財産刑（註三）——という政治的なものへと、意義および内容が變化、移行、あるいは再生してゆく過程を把えようと企圖した。しかし、それは、わが上代共同社會から古代國家への移行に隨伴し、またはその促進の條件でもあるところの採集經濟から農業經濟への移行、およびその後の經濟的變化、階級社會の形成、あるいは祭政分離の特殊性等の上代史における無數の問題にとりかこまれて居り、またその中にこそ解決の糸口があるこ

とを改めて發見した。

かくして、本稿はわたくしの漠然とした指摘の繰返えしに終つて仕舞つた。少しは百尺竿頭を一步進めたような氣もするけれども制限された紙數を單に埋めただけで、實際は、わたしの未熟さを示した他に何も收穫はなかつたであらう。しかし、それでも問題の提起ということでわが上代法史の研究に少しでも役立つところがあれば幸甚の至りであると考えて、敢えてこの草稿を公表する次第である。

(註一) 早稻田法學、三十二卷、一・二冊、八九頁以下。

(註二) ハラへから追放刑、死刑あるいは身體刑などの觀念もまた流出するが、本稿においてはそれらは指摘するにとどめ、財産刑、および損害賠償におけるハラへの變化に重點を置いた。

二

周知のごとく、わが古典上、ハラへには二つの形態がある。その一は、黃泉國へ伊邪那美命を訪ねられ、ケガレに接した伊邪那岐大神が筑紫の日向の橘小門の阿波岐原でなされたミソギハラへがそれである。古事記によると、伊邪那岐大神は『吾はいなしこめしこめき穢き國に到りて在りけり。故吾は御身の禊爲などのりたまひて』祓われたのであるが、このとき『故投げ棄つる御杖に成りませる神の名は衝立船戸神、次に投げ棄つる御帶に成りませる神の名は、道之長乳齒神、次に投げ棄つる御裳に成りませる神の名は、時置師神。次に投げ棄つる御衣に成りませる神の名は和豆良比能宇斯能神。次に投げ棄つる御褌に成りませる神の名は、道俣神。次に投げ棄つる御冠に成りませる神の

名は、飽咋之宇斯能神。次に投げ棄つる左の御手の手纏に成りませる神の名は、奥疎神。次に奥津那藝佐毘古神、次に奥津甲斐辨羅神。次に投げ棄つる右の御手の手纏に成りませる神の名は、邊疎神、次に邊津那藝佐毘古神、次に邊津甲斐辨羅神』、さらに『是に上瀬は瀬速し、下瀬は瀬弱しと詔りごちたまひて、初めて中瀬に墮りかづきて、滌ぎたまふ時に、成り坐せる神の名は八十禍津日神、次に大禍津日神。此の二神は、其の穢き繁國に到りましし時の汚垢に困りて、成りませる神也。次に其の禍を直さむとして、成りませる神の名は神直毘神——』と伝えられている。すなわち、ミソギハラへは、ケガレをはらうためにケガレが傳染して思うる身につけた物などを棄て、また、水中で身體のケガレを洗い清めることが主題になつてゐるのである（註一）。この伊邪那岐大神のミソギハラへの物語において、杖、帶、裳、衣、褌、冠、そして手纏等を棄て、水中に入つて身を滌いだとき、八十禍津日神、大禍津日神というような邪神が成り坐し、ついでその禍を直さんとして神直毘神以下の諸神が現われていることは、ミソギハラへの呪術的效果として、ケガレが消去したことを物語るものである。

かくして、本来ミソギハラへは、ケガレそのものをはらうものであるといえる。つまり伊邪那岐大神のなされたミソギハラへは、神に對してなした惡行によつてえたケガレを清除するという性質のものではなく、伊邪那岐大神が伊邪那美命を黃泉國（註二）に追われ、そこで、汚なく穢れている伊邪那美命の死屍を見たのであつて、穢れた場所へ行つて、最も穢れたものとされている死屍を見て逃げ歸つて來たというので、そのケガレを身體から除くためになされたハラヘなのである。かかるケガレを身につけることは、もとより、神に對するツミとしても觀念されたであろうが、この記紀の伊邪那岐大神の物語においては、單に身につけたケガレをはらいのぞくことのみがこの物語には示さ

れているのに過ぎないのである。これに對して後に觸れる履中紀五年十月のくだりにみえる天皇が車持君に命じて長渚崎においてミソギハラへをせしめたという物語は、おなじくミソギハラへを述べたものではあるが、この履中紀の車持君のミソギハラへは、神に對する犯行を謝すためのものであり、ケガレを棄て去るということよりも神への犯行を謝すために行つたという性質の方が強く現われている。この兩者の差異はミソギハラへの時代的展開の方向を示しているといふべきであらう。

(註一) ミソギは身滌である。古事記傳六(本居宣長全集、第一、二八七頁以下)参照。

(註二) 黄泉國が死者の國であることは古事記や日本書紀の一書に示されているところである。なお古事記傳六(前掲書、二六〇頁)参照。

なお死屍、その他死に關與することがケガレに強く關係するものであつたことは、天若日子の妻下照比賣が、夫の喪を弔いに來た阿遲志貴高日子根神を天若日子と過つたおり、阿遲志貴高日子根神が怒つて『我は愛しき友なれこそ弔ひ來つれ、何とかも吾を穢き死人に比ふる』(古事記)と云つたことによつても知ることができる。

さて、速須佐之男命が高天ヶ原において、天照大神の營田を阿離ち溝埋めなど多くのツミを犯され、これにより、天照大神が天岩屋にこもられた物語は、岩屋隱神話として周知のものであるが、これら速須佐之男命が犯されたツミに對して速須佐之男命はハラへを命ぜられている。ところで、この速須佐之男命が行われたハラへについては、古事に對し、日本書紀の記述の上に微妙な差異がみうけられる。すなわち、

〔古事記〕 是に八百萬共に議りて、速須佐之男命に、千位置戸を負ほせ、亦鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて

神やらひやらひき。

〔日本書紀本文〕 諸の神罪過を素戔鳴尊に歸せ、科するに千座置戸を以てし、遂に促め徹る、髪を抜き以て其の罪を贖はしむるに至る。亦曰く、其の手足の爪を抜きて之を贖ふ。已にして竟に逐降ひき。

〔日本書紀一書(イ)〕 已にして罪を素戔鳴尊に科せて、其の祓具を責る。是を以て手端の吉棄物、足端の凶棄物あり、亦唾を以て白和幣と爲し、洩を以て青和幣と爲す。此を用て解除竟へて、遂に神逐の理を以て逐ふ。

〔日本書紀一書(ロ)〕 故れ諸神大に喜びたまひて、即ち素戔鳴尊に千座置戸の解除を科せて、手の爪を以ては吉棄物と爲し、足の爪を以ては凶棄物と爲す。乃ち天兒屋命をして其の解除の太諄辭を掌りて宣らしむ。世人愼みて己が爪を收むるは、此れ其の縁なり。既にして諸神素戔鳴尊を嘖めて曰く、汝が所行甚だ無頼、故れ天上に住むべからず、亦葦原中國に居るべからず、宜、急に底根の國に適ねといひて、乃ち共に逐降去りき。

すなわち、まず、この物語に示されているハラヘは、神の忌み嫌う所業を行つたものに對して、千座置戸のハラヘツモノを科し、それにより神の怒りをやわらげようとしているものであつて、前述のミソギハラヘとは、ハラヘの性格が異つてゐる。

ところで、ここに掲げた日本書紀一書(イ)によると『是を以て手端の吉棄物、足端の凶棄物あり、亦唾を以て白和幣と爲し、洩を以て青和幣と爲す』とし、また、同一書(ロ)によると『手の爪を以ては吉棄物と爲し、足の爪を以ては凶棄物となす』とし、手足の爪が一種のハラヘツモノとして書かれている（註一）。しかし、これらの爪などをハラヘツモノとして神に捧呈したことには疑問がでてくる。元來、これらのものは、古代人にあつては、けがれやすいもの

であり、また、不淨なものであるとされている。その不淨なものを、不淨を忌み嫌う神にハラヘツモノとして捧呈することは考えられない（註二）。すなわち、ここに述べられている爪を抜き、髪を切ること等は、もとよりハラへとして考えられるべきものではあるが、そのハラへは、ハラヘツモノを神に捧げてなすハラへの系統に入るべき性質のものでなく他のハラへ、すなわち、ミソギハラへの系統に含めらるべきものである。つまり、ミソギハラへにおいては、ケガレを身體から取除くことが主眼になつてゐるけれども、時には、ケガレの附着してゐる手足の爪や髪を切り棄てる（註三）ことも當然に含まれたと思われる（註四）。このように解すると岩屋隠神話における、速須佐之男命に對するハラへには、ミソギハラへの系統に屬するものと、ハラヘツモノを捧げて行ふハラへの併存が認められうるのである。そして、岩屋隠神話における、この二つのハラへの關係は、ハラヘツモノを以てするハラへが行われた後にミソギハラへの系統に屬するハラへが行われたことになつてゐるが、これについて高柳博士は『しかし犯罪をもつてまず神に對する汚穢とした考えからすると、むしろ不淨なものを除去し放棄することが前提であり、その上で神を祀りその怒を解く方法の行われるのが順序ではなからうか。とすれば髪や爪に關する處置がまず行われ、その後で千座置戸に及んだと考える方が合理的である。髪や爪は被具として神に供えられるものではなく、千座置戸を神に供えてこれを祀るにあたつて、その前にすて去られるものであると解すべきであらう』（註五）としておられる。たしかに、先に指摘したように、この二つのハラへが性質的に異つてゐるものと解するならば、岩屋隠神話において示されているこれら二つのハラへの前後關係には疑問がでてくるのである。

（註一）宣長は、この點について、「一ツには、此祓は極めて重き祓なる故に、祓物も極めて多く千位を徹るなれば、須佐之男ノ

命の所有する物の限りを取りても、猶足ざる故に、其ノ御身に生たる髮鬚爪までを取て、祓の料ノ物に用るなり、「白和幣青和幣とす」とあるにて、祓ノ料なるをしるべし、一ツには、所有する物も穢レなれば、所有する物をみなから棄てても、なほ清まりはてざる故に、其ノ御身に生たる物までを、拂い棄て清むるなり」と解している。古事記傳九、(前掲本居宣長全集、第一、四二五頁)。

(註二) この點については、瀧川博士「高柳博士「上古の罪と祓および刑」(法學、第十五卷、二號、二八頁以下) 參照。
士「上古の罪と祓および刑」(法學、第十五卷、二號、二八頁以下) 參照。

(註三) 石井博士は、『血を見ることを嫌つたに違ひない神が、髪はともかくとして、祓の方法として、手足の爪を抜かしめるということは考えられない。これはおそらく、手足の爪を切棄てることが後に誤まり傳えられたのであらう』(刑罰の歴史「日本」三頁)とされている。もとより、ハラヘとしては、石井博士のいわれるように爪を抜くということは考えられない。しかし、ハラヘから刑罰へ轉化して行つた過程において、史料上の裏付けはできないが、爪を切棄てることから、身體刑としての爪を抜くことへと變化して行つたこともあつたのではないだろうか。それ故、この書紀の文章は、身體刑としての爪を抜くことを知つていた編集者の先入觀がかくあらしめたとみることとはできないだろう。

(註四) それ故、書紀の一書において、爪を以て吉藥物、凶藥物とし、また、唾を以て白和幣、洩を以て青和幣としたと傳えていることは、ハラヘの本質より考えるならば納得できないものである。

(註五) 高柳博士、前掲書三一頁。

もつとも、この速須佐之男命のハラヘについての疑問は、以上述べた二つのハラヘの前後關係についてのみならず、そのほかにも存在する。すなわち、前掲の記紀の文を見てもわかるように、速須佐之男命は、ハラヘを終えた後、神ヤラヒに處せられているのであるが、この神ヤラヒは、いかなる性質をもつているものであらうか。速須佐之男命は、以前、父の伊邪那岐大神により神ヤラヒを命ぜられていた。そして、父神に追われた速須佐之男命は、根國に赴くに先立つて暇乞をするために天照大神を訪ねたのであるが、その高天ヶ原で、天照大神に對して種々のツミを犯し

て仕舞つたのである。かくて、速須佐之男命は、高天ヶ原の神々により更に神ヤラヒに處せられたわけであるが、この速須佐之男命が受けた二つの神ヤラヒは、本來、ハラへに屬すべきものであらうか、あるいはハラへに屬さないで刑罰として考えるべきものであらうか。石井博士は、速須佐之男命のツミは重く、そのケガレはひどかつたのに違いない、『そこで、ふつうの祓すなわち、神に祓具を捧げ、手足の爪を切り棄て、神主が祓詞を奏上したのみでは、穢はとうてい、消滅しなかつたのである。こういう穢の多い人を、高天原に置いておくわけにいかない。そこで、これを神逐いに逐つたのである。ここをもつて見ると、書紀一書に「解除竟へて」とあるのは、通常の祓を終えてという意味に解すべきである』（註一）とせられ、『この神逐は祓の補助手段と見るべきものであるが、それが追放刑の萌芽であるとはいえるであらう』（註二）とされて、この神ヤラヒを一種のハラへと解されておられる。また、瀧川博士は、その著「日本法制史研究」において『犯された罪が、最も重大である場合には、犯人の身體全體を河水に棄てた。これが後に死刑となり、又追放刑ともなつたのである。高天原から神逐ひに逐はれ給うた素戔鳴尊が、出雲の簸の川の上流に降り立つてをられることは、尊がこの最も重きハラヒを科せられ給うたことを證するものである』（註三）とされて、神ヤラヒをハラへの重きものと解しておられる。だが、高柳博士は『いずれにしても諸神が合議してスサノオノミコトに負わせた解除は、千座置戸を徴しミコトの肉體を毀傷することから成立つていたのであり、神逐いはその上でさらに附加した處分であつたとみられるのである』（註四）、『ミコトに對する神逐いの處置は清祓に屬するものでなく、刑罰の一種と解される』（註五）（註六）と述べられて、これらの物語にみえる神ヤラヒを刑罰として把えておられる。

(註一) 石井博士、前掲二四頁。

(註二) 上述のように、速須佐之男命は、高天ヶ原で八百萬の神々により神ヤラヒを受ける以前にすでに父神によつて神ヤラヒに廻せられているのであるが、この二つの神ヤラヒの關係について、石井博士は『高天原で追放されたのは、二重の追放になるという説もあるが、これも「急、かに」追放したというところに意味があるのである。素戔鳴尊は天照大神に暇乞のために、高天原に行くことは、父母二神からも許されているのであるから、本来ならば、なお滞在してもいいのであるが、穢が甚しくは、はたが迷惑するので、早急に高天原より追放されただけのことである。「急かに」という文句の意味に氣が付かねば、右の文の意味を理會できない』とせられている。石井博士、前掲書二四頁。

(註三) 瀧川博士、日本法制史研究四二頁。しかし、同博士は別書、日本法制史、においては『この神逐が解除そのものでなかつた事は、書紀に「用_レ此解除竟。遂以_二神逐理_一逐_レ之」とあるによつて明かである』とせられている(同書六三頁)。この瀧川博士の兩書の間の相違は高柳博士も觸れておられ(前掲論文、二八頁)、これに對して瀧川博士は『これは變説といふほどのものではない。後の著述(日本法制史―筆者註―)では記紀時代に於ける刑罰の狀況を説くことが必要とされたからである。追放も本原的にはハラへの一種であつたに相違ないといふ考へは、前々からもつてゐたのである』(法制史研究、二卷、一一三頁)と斷つておられる。

(註四) 高柳博士、前掲二號二七頁。

(註五) 同右、三號四一頁。

(註六) 高柳博士は、速須佐之男命に對する神ヤラヒは『父神による地上からの放逐と、八百萬神による高天原からの放逐との二重の意味をもつていた』とせられ、その『父神の宣した神逐いは、ミコトが父神の命に背きその任務をはたさなかつたことに對するもので、その性質から推すと、族長的或いは家父權的權力にもとづく制裁と考えることができる。……(中略)……しかしミコトがさらに高天原において諸神により神逐いに處せられたのは、血縁的社會をこえたその社會全體からの放逐を意味するもので、はるかに重大な効果を伴つていたと考えられる』(前掲三號四一頁)とされる。たしかに、われわれは、この二つの神ヤラヒの立

つている社會的基盤の相違をみなければならぬし、それがこの物語を説明する重要な一つの鍵であると思ふのである。

かくして、速須佐之男命についての神代史のこの部分の物語で、ツミとハラヘが重要な構成要素となつてゐることを確認しながら、この物語に述べられてゐるハラヘは、ハラヘツモノを捧げて行かうハラヘのみではなく、ミソギハラヘの系統に屬すと思われるハラヘもまた示されてゐることをわたしは主張した。すなわち、髪や爪をとるといふことは、本來穢れたものを棄て去ることを主眼としたミソギハラヘの性格をもつてゐるものであり、また、ミソギハラヘは、ケガレがついてゐると思われるものを棄て去り、または洗い清めるということがその本質をなしてゐるのであるが、このケガレを除去するという觀念から、さらに推測するならば穢れてゐる物ばかりでなく人をも境界外に放逐するといふことも當然にで來たのもあろう。つまり、速須佐之男命が命ぜられた神ヤラヒは、本質的にはミソギハラヘの系統をひくものであつたと思われるのである。

以前にも觸れたことがあるのだが（註二）、速須佐之男命についてのこれらの物語のみならず、記紀の物語の中には、一つの主題のなかに種々の要素が組み合わされてゐることが多くある。すなわち、本來、別個なものである要素が集められ、組み合わされた上に、例えば速須佐之男命というような人物が、これらの物語を構成する諸要素を集約するところの主人公として登場せしめられてゐるのである。だから、上述の岩屋隠神話においても、話の筋は一應通つてゐても、その物語を構成してゐる要素は、けつして同一の源流から出てゐるものではなく、異なつた諸要素の混

合により成つたと思われる。その故に、各々の要素は獨立した別個のものであると先驗的に考えなければならないのであり、それを無視して、物語に含まれている各々の要素を論ずることは極めて危険であるといわなければならないまい。かくしてわたくしは、一つの物語のなかに、別系統に屬するミソギハラへとハラヘツモノを捧げるハラヘとが無秩序に混在したり、あるいは、ハラヘが終つたのちに神ヤラヒというようなものが出現したりすることは當然にみられる現象と思うのである(註二)。

(註一) 前掲拙稿九二頁。

(註二) それ故にこの物語だけではこの物語における神ヤラヒが、ハラヘなのか刑罰であるのかを斷定できないのではなからうか。しかし、もとより、死刑とか追放刑というようなものの淵源として神ヤラヒが考えられるということはいえるであらう。

三

前節において、わが古典上にみえる二つの型のハラヘについて個別的に考察したが、しからば、このミソギハラへとハラヘツモノを神に供えて行ふハラヘとは、いかなる關係に立つているのであろうか。ミソギハラヘは、前述のごとくケガレ汚垢(註一)を清除するところにその本質がある。これに對し、ハラヘツモノを神に供えるハラヘは神の怒りをとくために一定の物を神に捧げ、それによつて神の怒りをやわらげんとするところにその本質がある。かくして、後者のハラヘは、ハラヘツモノという一定の物が重要な要素になつていたのであり、また、そのハラヘツモノが、特に個人に科せられる段階に至るならば、ハラヘツモノを供えて行ふハラヘは、上代社會において、物の所持

についての強い意識を人々がもっていることを前提としなければならぬ（註二）。このように考えてゆくと、ハラヘツモノを神に供えるハラヘは、そんなに古い起源をもっているとは考えられないのである。

本来、ハラヘは、神の忌むケガレを清除するものであつたと思われる。そして、その方法としては、前節でみた阿波岐原でなされた伊邪那岐大神のミソギハラへのごとく、身體についているケガレを取除くことにあつたと推測される。そして、それは、伊邪那岐大神が杖、冠などをうち棄てられたように、身體を清めることはもとより、穢れている物をも棄て去ることを含んでいたのであり、また、さらにこの、身につけていた穢れた物を棄てることのみでなく、ケガレを一定の物につけて棄てることによつてケガレを清除するということも行われていたのである（註三）（註四）。

ところで、上代社會において、財産の個人所有ということが起つた後においては、ケガレをつけて祓うべきハラヘツモノは、そのケガレと關連ありと思われる人に所屬している財産から徴せられたものではあるまいか。そして、時が経つに従つて、ケガレを一定の物につけて祓うということよりも、ある人に、ケガレをつけて祓うべきものを提供させるということが主眼となつて來たと推量され、ここにこの種のハラヘの本質の變化をみることができるのではなからうか。つまり、かかる狀態の變化に伴つて、ハラヘツモノの本來の意義であるケガレを棄て去るという宗教的要素は次第に稀薄となつて、ケガレある人に、ケガレをつけて祓うべきものを提供させるという段階から、更にハラヘツモノをツミある人から徴すという段階へ昂められ、贖物的な意義をもつて來たことが考えられ、そして、それは純粹な宗教的ハラヘから公刑罰へという上代社會における制裁が移行してゆく過渡期に出現したものとしてわたくしは把握したのである。もちろん、個人にハラヘツモノを科すハラヘは、宗教的性格をもっているものであるが、他面

においては、けつして宗教的要素のみではなくして公刑罰的な性格もあつたのであり、この兩意義の前者から後者への變化のなかに古代國家の成立とそこにおける刑罰をみることができると思うのである。しかし、わたくしのこの推測を直接に裏付けできる史料はない。だが、そのはじめにおいては、宗教的意味をもつていたものが、時代の経過につれて現實的、政治的、あるいは社會的意味あいをもつ財産になつて仕舞つてゐる例は全くないわけでもない。例えば、鏡は、元來、齋鏡となすべきものであつて、神代紀、景行紀、そして仲哀紀などに、この鏡の祭器としての性格が明確に現われている（註五）。かかる鏡は、共同體においては、傳世の祭器として司祭的長老や首長によつて保管されていたのであるが、かかる世々傳えられるべき鏡が副葬品としてある種の古墳から發見されるに至つてゐる。これは、小林行雄氏によれば、古墳營造者が『傳世の寶器を保管しつづけたある司祭的首長の死にあたつて、その首長の存在をより高めるためにはじめて古墳を作り、しかも寶器の傳世を絶つてこれを副葬品のうちに加えることによつて、彼をかくも權威あらしめた聖性の根本を、そこに棄て去ることをあえてしたのである』（註六）し、またこの鏡の副葬は、古墳文化中期前半において、その數がいちじるしく増加してゆく傾向にあるが（註七）、このような現象は、元來、宗教上の——祭器としての——存在であつた鏡が次第にその宗教性をなくして行つた一方、財産としての性格を濃くして行つたことを物語つてゐるのである。このような鏡における性格の變化は、祭祀の對象たるものにおける『物』の發見に基づくものであり、このことは宗教規範上の對象たる性格を強くもつていたハラヘツモノが、財産としての性格をもつに至つたことを推測させるのである。すなわち、これらハラヘツモノにしても、鏡にしても、本來は宗教上のものであつたのであるが、上代社會において財産の所有という觀念が強化されるに伴つて、その性格を變じ

て宗教規範以外の規範——法規範——上の性格をもつに至つたのであるとわたくしは思つてゐる。

(註一) 古事記上巻、伊邪那岐大神のミソギハラへのくだりにおいて『其の穢き繁國に到りましし時の汚垢^{けがれ}に因りて成りませる神……』としてゐる。

(註二) ハラヘツモノの性格の變化については、さらに上代社會において自然神を中心とする宗教から人格神を中心とする宗教へと轉化して行つた事實も考慮に入れて考えなければなるまい。何故ならば、ハラヘツモノを捧呈することにより神の怒りがやわらぐというためにはその神のなかに、人間的な要素がいくぶんなりともなければならぬからである。

(註三) かかる慣習は、現在においても人形^{ひながた}を流すという慣習にみることができ。なお、前掲古事記傳四二五頁参照。

(註四) 津田博士、日本古典の研究、上、四四四頁以下参照。

(註五) 古事記天孫降臨のくだりに『此の鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拜くが如、いつき奉れ』と記されてゐるし、また景行紀十二年や仲哀紀八年の神夏磯媛の物語や、あるいは岡縣の祖熊鰐、そして伊賀縣主祖五十迹手についての物語においても鏡の祭器としての性格がみえてゐる。

(註六) 小林行雄氏、古墳の發生の歴史的意義(史林、三八卷一號七頁)

(註七) 鏡山猛氏は、日本考古學講座において『鏡や劍が彌生文化の墳墓の副葬品としてあげられてゐるが、屍ないしは死靈を鎮壓する呪具と解されてゐる。ただし純粹かつ單純に除魔・鎮魂の具としてのみ解されてよいかはなお疑問が残される。數十面に達する鏡や數多い劍・矛類の副葬は、それが特例であつても、他に何等かの意味が考慮されてよいのではなからうか』と述べられてゐる(日本考古學講座、4一六四頁)。

ところで、天武紀五年八月辛亥には、

詔して曰く、四方に大解除爲しむ。用ゐむ物、即ち國別に國造祓柱を輪せ。馬一匹、布一常。此外の郡司は、各

刀一口、鹿皮一張、鑢一口、刀子一口、鎌一口、矢一具、稻一束、且た戸毎に麻一條。

とある。また、神祇令をみると、

凡そ、六月十二月の晦の日の大祓には、中臣祓の麻を上れ、東西の文部は、祓の刀を上り、祓の詞を讀む。

とし、あるいは、

凡そ、諸國に大祓すべくば、郡毎に刀一口、皮一張、鋏一口、及び雜々の物等、戸別に麻一條を出す。其國造は馬一疋を出す。

としている。これらによると、大祓におけるハラヘツモノは、個人個人に個別的に科せられるのではなく、全國家的規模において科せられていることがわかる。もとより、このような全國家的規模においてハラヘツモノが科せられていることは、大祓というものの本質より來ているのもあるうが、しかし、他方そのことは、時代が遡るにつれて、ツミが、單なる個人責任上のものとして考えられていたのではなく、社會全體の責任として考えられていたことを推測せしむるのである。本來、ハラヘツモノは、個人に科すということよりも共同體全體のケガレをはらうために全共同體の物として神に供えられたのもあるう。つまり、ハラヘは一方においては祭祀上のものであると同時に、他方においては個人のものというより全共同體のものとして意識されていたとも思われる。しかし、上代社會における生産の新たな展開は、共同體を分裂させ、共同體の構成員に個の意識をもたしめた。ここにおいて、ハラヘは全共同體の責任としてのハラヘから個人責任としてのハラヘと移行して行つたのであり、また同時に、ハラヘの宗教的意味あいが淡くなり、罰としての性格が濃くなつて行つたと思われる。かくて、わたくしは、記紀に示されている速須佐之

男命が科せられたハラヘツモノは、それがこれのようにして多少とも贖罪の意味をもつに至つた時代のハラヘツモノの複雑な様相の上に立つてゐるものと思ふのである。

四

原始共同體が崩れ、古代國家ができ上るにつれて、ツミやハラへは、その性格を變えて行つた。すなわち、原始共同體にあつては、ツミは、神に對して犯されるものであり、ハラへは、神に向つてなされたのである。しかし、原始共同體より古代國家へと進むにつれて、かつては神の代理人として、全共同體の意思に直接の關係をもつ公僕としての指導者や首長が、いまや神の權威によるのではなく、みずからの力によつて民衆を統帥する君主へとその性格を變えて行つた。それに照應して、かつては、共同體全體の意思に直接關連するものとしての神の權威に由來し、神の規制の下におかれたツミやハラへは、原始共同體の分裂によつて生じ、共同體と對立した個人としての君主、また、その君主をとりまく一群の支配者たちの意思によつて左右される可能性が生れて來た。

ところで、縄文式文化時代が、無階級の時代であつたときめてしまふことはできないが（註一）（註二）、もしあつたとしても、その時代の階級差はそんなに著しいものであつたとはいえない（註三）。しかし、これが一旦彌生式文化時代の中期以後に至ると階級社會の存在は明白になつて來る。例えば、北九州の、甕棺が発見される共同墓地のように、共同墓地という様式は前期とおなじでありながら、ある特定の甕棺からは、多くの副葬品を発見することができる——例えば、銅鏡を例にとると、須玖では三十三面以上、三雲では三十五面といわれている——が、このよう

な、寶器と思われる副葬品を多くもっているものは、やはり、普通の人とくらべ、生前において他の者と區別さるべき特別の地位にあつたといえる。しかしこれらの副葬品は依然として共同墓地内で發見されているのであつて、その事實は、階級社會の萌芽を物語るものではあるが、しかし、族長や長老などが、まだ強く共同體にしばられていたことを物語っているのである。だが、このようにして、ともかく發生した階級社會は、時代が下るにつれて、ますます強固に形造られて行つた。そして、墓制の上において、族長層が明確に一般民衆と隔絶され、さらにかかる傾向が進んで古墳文化に至ることはいまさらいうまでもないであらう。

ところでこのようにして生れて來た族長層の性格は、いかなるものであつたのであろうか。崇神紀六年には、是より先き、天照大神、倭大國魂二神を並に天皇の大殿の内に祭ひまつる。然れども其の神の勢を畏れて、共に住みたまふに安からず、故れ天照大神を以ては、豐鍬入姫命を託けまつりて、倭笠縫邑に祭りたまふ

とあるし、また、常陸風土記行方郡のくだりにみえる古老の語つた傳説によると、

石村の玉穗宮に大八州知らしめしし天皇（註四）の世、人あり、箭括氏麻多智といふ。郡より西の谷の葦原を點て、墾闢きて新に田を治りき。此の時、夜刀の神、相群れ引き率て悉盡に到來り、左に右に防障げて、耕佃することなからしめき。ここに麻多智、大きに怒の情を發し、甲鎧を著被けて、自身仗をとり、打ち殺し驅せ逐ひき。すなはち山口に至り、杭を標てて堺の堀を置き、夜刀の神に告げて曰く、「此より上は、神の地たることを聽さむ。此より下は人の田と作すべし。今より後、吾、神の祝となりて、永代に敬ひ祭らむ。冀くは祟ることなく恨むことなかれ」といひて、社を設けて、初めて祭りきといへり。すなはち還耕田一十町餘を發し、麻多智の子孫

相承けて祭を致し、今に至るまで絶えず。

と伝えられている。これらの史料は、上代社會において、人間の世界と神の世界とが分化してゆく過程を示しているが、しかし、常陸風土記に現われている麻多智のごとく、首長とか君主というようなものは、けつして、從來の神との關係を完全に斷ち切つたものではなかつたのである。彼らは『昔祖禰躬ら甲冑を環き……』（註五）といつたように、その地位を武力によつてきづき上げたのであろうが、單に武力によつて君主たりえたのではなく、彼らの背後には、依然として神の權威が存在し、また、それを利用していたのである。そのようなところに、この時代の君主たちの性格がみられるのである。

（註一）後藤守一氏、「上代に於ける貴族社會の出現」（日本民族）四八頁參照。

（註二）杉原莊介氏は、彌生式前期頃までの『支石墓も甕棺も、その副葬品はせいぜい裝飾品とか石鏃とかの程度である。これまでの段階はそれが集合墓地であり共同墓地である形態をとることが重視されなければならない。農業が發生したとはいえ、この時期までは共同體的な色の濃い社會であり、たとえ首長が存在したとしても、それは大きな權力を有するものではなかつたであらう』（日本考古學講座、二三頁）とされている。

（註三）前掲後藤氏論文八四頁參照。

（註四）繼體天皇。

（註五）宋書倭國傳。

以上のごとくみて來ると、次のように結論できらであらう。すなわち、始源においては、ツミは、神に對して犯さ

れるものであつたし、ハラヘは、神に向つてなされるものであつたが、原始共同體におけるハフリなどの神の代理者は、神の代理者としてツミを決定し、ツミに對するハラヘの儀式を執行したと思われる。しかし、かかる神の代理者が代理者たる資格をそのままに保持しながら次第に君主の地位を築き上げて行くに従つて、ツミやハラヘは、その性格を變えて行つた。ツミは、神の忌み嫌うことを行うことであつたのだが、いまや、君主の嫌うことや君主の命令に違背することが罪として取扱われることになつた(註一)。一方において、ツミにこのような變化があつたことは、他方において、當然にそれに對應するハラヘの變化を推測せしめる。すなわち、ハラヘも神に向つてなされるのではなく、君主に對して行われるに至つた。古事記朝倉宮(雄略)のくだりにみえる志幾の大縣主の物語において、大縣主は、天皇に能美の御幣物を献つてゐる。この大縣主が献上したものは、白き犬に布を繫けて鈴を著けたとされているが、この献上物は、單なる謝罪のための貢物ではなく、多分に呪術的性質をもつた幣物であると思われる。すなわち、この物語の献上物はハラヘツモノの性格をもつてゐるのであり、それを受ける者が、神のみならず君主も受けてゐるということを示してゐるのである。しかし、他方、履中紀五年十月に、天皇が神の祟を治めたまわずして皇妃を亡つたが、そのことを悔いて、その咎を求めた物語があるが、そのなかで車持君の處分として、

爾、車持君と雖も、縦に天子の百姓を檢校れり、罪一なり。既に神祇に分寄たる車持部を兼ねて奪取れり、罪二なり。則ち惡解除、善解除を負せて、長渚崎に出でて祓禊がしむ。既にして詔して曰く、今より以後、筑紫の車持部を掌ることを得じ。乃ち悉に收めて、以て更に分りて三神に奉る。

と傳えられているものや、雄略紀十三年三月の

狹穂彦の玄孫齒田根命、甥に采女山邊小島子を奸せり。天皇聞しめして、齒田根命を以て物部目大連に收付けて責讓めしめたまふ。齒田根命、馬八匹、大刀八口を以て罪過を祓除ひ、既にして歌ひて曰く、山邊の小島子故に、人街ふ、馬八匹は惜けくもなし。目大連聞きて奏す。天皇齒田根命をして資財を餌香市邊の土に露に置かして、遂に餌香長野邑を以て物部目大連に賜ふ。

という記録において現われるハラへは、もとよりそのツミは神の權威に對するものではあるが、制裁は、ハラへという言葉を使用していても、けつして宗教規範上のハラへではなく、刑罰としての性格を多分にもつてゐるものである（註二）。前にも觸れたように、ハラヘツモノは、神の怒りをやわらげるために供えられたものであるが、しかし、かかるハラヘツモノは、他方において、罪人からハラヘツモノを徴收することになると、かかるハラへは容易に財産刑に轉化する可能性をもつており、いま、ここにみた履中紀や雄略紀の物語におけるハラへは、かくして、ハラへという名稱で呼ばれてはいるが、その實體は、財産刑であつたのであり、前掲の古事記朝倉宮のくだりの物語や、これら二つの物語は、ハラへから刑罰への過渡期における状態を反映した物語であるとみてよいであらう。

（註一）例えば、安閑紀元年七月にみえる大河内直味張についての物語において、皇室が求める屯倉の地を、大河内直が勅使を欺いて奉進しなかつたことがツミになつてゐる。すなわち、皇室にとられることを拒否したことが犯罪になつてゐるのである。

（註二）高柳博士も、この點について『その罪が神祇に關したものであるとはいへ、むしろ俗世的刑罰の方法として財物を徴し贖罪させることに主目的があつたと推察される解除や祓除の名は用いられたが、もはや汚穢をすて去り財物を捧げて、神によつて清められるという精神は窺えなくなつてゐるようである』（前掲論文、三號四六頁）とされてゐる。

五

ハラへには、以上のようにして、政治權力の確立により刑罰——とくに財産刑——へと變化してゆく新しい部分が現われて來た。そして、この刑罰を科す君主の權力は、以前の首長などがもつていた力のように共同體全體の意思——神——に關係のあるものでなく共同體とは分離した君主の個人的意思に基くものであり、刑罰は君主個人の意思によつて科せられるという部分が現われるに至つた(註二)。しかし、政治權力をもつてゐる者により科せられたが故に刑罰と觀念するのであるが、それが、政治權力のない私人の場合においては、いかなるものになつて行つたのであろうか。孝徳紀大化二年三月の詔によれば、

復た夫を亡へる婦有りて、若しくは十年及び廿年を経て、人に適ぎて婦と爲り、并せて未だ嫁がざる女、始めて人に適ぐ時に、是に斯の夫婦を妬みて祓除せしむるもの多し。

復た邊畔に役はれたる民有り、事了へて郷に還る日、忽然に得疾して、路の頭に臥死ぬ。是に路の頭の家乃ち語りて曰く、何の故か人をして余が路に死せしむると。因りて死者の友伴を留めて、強ちに祓除しむ。

復た百姓溺れて河に死ぬに逢へる者有り、乃ち謂りて曰く、何の故か我れに溺人を迎はしむるといひて、因りて溺者の友伴を留めて、強ちに祓除しむ。

復た役はるる民有りて、路の頭に炊ぎ飯む。是に於て路の頭の家乃ち謂りて曰く、何の故か情の任に飯を余が路に炊ぐと、強ちに祓除しむ。復た百姓他に就きて甑を借りて飯を炊ぐこと有り。其の甑物に觸れて覆る。是れ甑

の主乃ち祓除しむ。

というような惡習があつたことが知られている。もとより、かかる弊風を、この詔は禁止しているのであるが、ハラヘが、民事上の損害賠償たる性格をもつに至つていることを、これらの史料によつて推測できる（註二）。もつとも、そのハラヘと稱したものがいかなるものであつたかは、この文だけではつまびらかではないが、おなじ詔のなかに馬の飼養を託された者が『是の若き牡馬は、己が家に孕めば、便ち祓除しめて、遂に其の馬を奪ふ』と記されていることは、少くとも財産の提供をふくんだものであることを推測せしめる。もとより、ここに現われているハラヘが、本來のハラヘではあるということとはできない。刑罰への轉化にあたつて、ハラヘが贖罪としての性格をもつて行つたことは、すでに述べたが、しかし、元來、君主の行使した刑罰權には多分に私的要素が包含されていたことは否めない。かくすると、宗教的なハラヘが世俗化されてゆく過程において、ある場合においては、そこに政治權力關係を基礎にもつた場合もあるであらうし、政治權力關係とはなんら關係がなかつた場合もありえたであらう。すなわち、ハラヘが世俗的なものになり、私的要素が、ハラヘのなかにみられるようになった時、そのままの姿で政治的權力と結びつかずに進化して行つた場合において、わたくしは、ハラヘは損害賠償としての性格を他方においてもつに至つたと推察するのである。もつとも、この場合、どのような經路を辿りながら、この孝徳二年の詔にみられるものになつたかは、ハラヘから刑罰——財産刑——への轉化とおなじく史料の上において明らかにすることはできない。しかし、この詔において、弊風とされている損害賠償的な行爲がハラヘと呼ばれていることには、注目しなければならぬと思う。

（註一）拙稿前掲九〇頁、一〇一頁（註二）参照。

（註二）この點については高柳博士、前掲論文三號四六頁以下参照。

六

ハラヘが、共同社會の全員にふりかかると思われるケガレを清除するために神に對して行われたその全共同社會による災厄の『公的放逐』（註）の具現として生れたとき、そして、その意義の純粹性が強く保持されていた最初の間は、それは全くの宗教的義務であり、儀式であつた。直接ケガレのついでに物を水で洗つたり、あるいは境域外に棄てることが行われ、時にはケガレのある物につけた後、それを棄てるところの、かくしてわが上代共同社會において行われた。この後者の、ケガレのある物につけて棄てるところの、その物自體が最初のハラヘツモノであつた。すなわち、その時期ではミソギハラヘとハラヘツモノを神に供えて行うハラヘとは不分離の關係にあつたのである。しかし、この不分離における宗教的色彩は、また、古代社會における共同體的紐帶に基いたものであつた。

私有財産への意識の強化、原始共同社會から古代國家への移行過程に伴つて、一方では物を捧げて神の怒りをやわらげる必要が感ぜられ、他方においては、ハラヘツモノをある人から徴するというようなことが現われて來た。かくして、ハラヘツモノが始めて獨自的なものとしてミソギハラヘに對立してはつきりと現われ、しかもそれは、宗教的色彩から公刑罰としての政治的要素への變化を急速に辿つて行つた。それに加えてミソギハラヘも別の途を辿つて變化して行つた部分が現われたのでハラヘに關する古代人の思维の混亂を來していることは既にみた通りで

ある。しかし、すべてはわが上代共同社會から古代國家への急速な移行に對應するものであつた。その故に、ハラへの本質、および變化の根底を把握するためには、わが上代社會における採集經濟から農業經濟への移行、その後の生産の變化をその前提として把握することの必要を、わたくしは痛感するのである。この見地に立つてわたくしは後日にハラへを改めて追求してみたいと考える。

神のものであつたハラへが人間の世界のものになつたとき、新しく生れたものは人間の世界をある人間——君主——が支配することであつた。この君主は、自己の權力を確立するために共同體的要素を無視できなかつたし、また、これを利用さえした。その反映がハラへにおける宗教的要素から刑罰という政治的色彩への微妙な變化にあることをわたくしは論じた。

ハラへにおける共同體的紐帶、結合から君主の支配權力への變化をわたくしは本稿では平面的にしか考察しなかつたが、その際に君主の支配權力に結合、または滲透して行つたハラへとは別に一般民衆におけるハラへの意義の變化にも觸れた。かくして、わたくしは孝徳紀大化二年の詔に現われた弊風に注目した。この君主と民衆におけるハラへの差異は何であらうか。前者の公刑罰——財産刑、後者の民事的損害賠償という法的意義を指摘したわたくしは兩者の間に遠い距離を感じはしなかつた。それは、古代社會における刑罰の性格のある部分に、この詔に示されている弊風といわれているものとおなじもの——私的本質——をみただけである。

(註) フレイザー「金枝篇」抄略本、永橋卓介譯(四)、岩波文庫版、一二二頁以下参照。